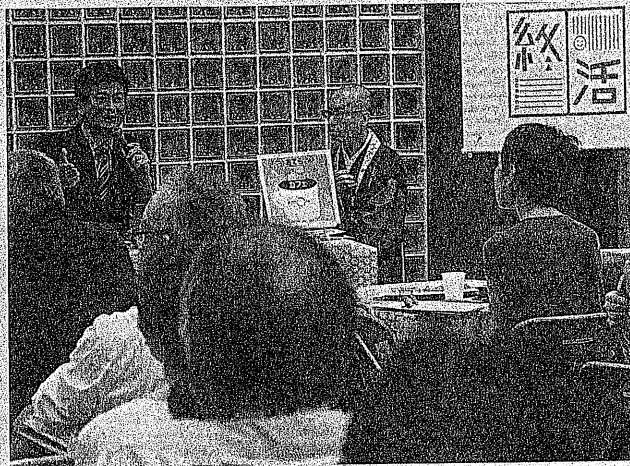


お寺で終活カフェ



終活カフェでは参加者が僧侶や専門家のお話に耳を傾けた(9月3日、大阪市天王寺区)

相続や死生観 気軽に相談

終活カフェ以外にも寺でのヨガ教室や婚活パーティーなど寺や住職が市民と交流するイベントが相次ぎ登場している。「開かれた寺」を自指す背景には檀家の減少など市民の「寺離れ」がある。

檀家減少も背景

で、大都市ほど割合が低い傾向がつかえる。同法人の井出悦郎代表理事は「法事などの簡素化が進み、僧侶と縁をつき合わせて話す機会も減った。法事や葬儀の意味合いも十分に伝わっていないのが現状だ」と指摘する。

法事簡素化 細る交流

均3000万円前後だった宗教法人の年間収入はおおむね減少傾向で、2013年度には同2105万円まで落ち込んだ。法要でお布施を納める機会や額の減少、通夜や告別式などで火葬する「直葬」を優先する人が増加。先祖の墓を自宅近くに移動する「改葬」も広がり、地方を中心に経営難に陥る寺は増えている。

井出代表理事は「寺は市民に積極的にアプローチし『開かれた寺』を目指す工夫が求められる」としている。

心の整理 一歩目に

自らの死や葬儀、墓について寺院で気軽に相談できる「終活カフェ」が人気を集めている。高齢化が進んで人生の閉じ方への関心は高まるが、具体的に何をすればいいかわからない人は多い。終活カフェには相続などについて専門家の助言を受けられるものもあり、参加者からは「残りの人生をどう生きるか考えるきっかけになった」との声も上がる。(奥山美希)

「葬式っていくらかかるとは」「死ぬのは怖い。死後の世界ってどうなっているんですか」。8月に大阪市天王寺区の應徳院で開かれた終活カフェ。僧侶を囲んで話す参加者からは、こんなさつぱりな質問が飛び出していた。カフェには

終活カウンセラーや相続手続の専門家も参加。この日は家族に代わって死後の事務を行うNPO法人「りすシステム」(東京・千代田)が、自身の葬儀などの生前契約や身元保証人の仕組みを説明した。

参加した野村富雄さん(88)は「終活という言葉はよく耳にするが、何から手をつければよいか分からなかった。カフェに参加して、やるべきことが明確になった」と満足そう。舞台照明技術者のホシノ貴江さん(64)は「自分の死や葬式をイメージするうちに、残りの人生をどう生きたいか考えた」と話した。

應徳院は2018年7月に終活カフェを始め、これまでに3回開催。想定を上回る参加者が集まっている。企画した同院の職員、斎藤佳津子さん(51)は「寺は一般には観光や仏事でしか近寄らない場所。市民と寺の距離をもっと縮めたい」。同院の主任、秋田光軌さん(33)は「宗教の押し付けでなく、その人らしい終活を考える機会になれば」と話す。

寺の住職が、人生の最期にどう向き合うかをテーマにカフェを開く取組は全国に広がる。秋田眞能代市の感応寺は3月と9月、地元のコーヒーストールと連携し、住職による講話とコントパブスのコンサートを組み合わせた終活カフェを開いた。山梨県笛吹市の大野山福光園寺の副住職、鈴木秀彰さん(39)は「死生観カフェ」を2カ月に1度開催。参加者の多くは身内を亡くした人などだ。